

I 事業の概要（地域の実情含む）

東日本大震災や台風10号から、久慈は自然災害の影響を強く受ける地域であることが経験として理解されている。復興教育スクール事業を通し、そのような災害発生時に自分の身を守ることに加え、地域の一住民として高校生ができる支援について考えさせた。また、昨年度地域連携型の指定を受け、近隣の久慈小学校、久慈中学校と協働しながら防災や復興について考える取り組みを進めてきたが、今年度指定を外れたあとも自主的に地域防災推進委員会を開催したり、NIEの活動を通して、地域における防災・復興上の共通課題の共有を図ることに重点を置いて取り組みを実践した。さらに、4年間続けてきた宮古市田老地区との交流については一戸高等学校との連携を行い、自校の枠を超えた実践を行うことを目標に事業に取り組んだ。

II 取組の概要

1 地域連携に係る取り組み

昨年度、本校は隣接する久慈小学校、久慈中学校と地域連携型の指定を受け、地域の防災力の向上を図るため、互いの学校の避難訓練や、各校で開催している防災講座等への参加を通し、異なる発達段階にある生徒の実態について理解を深めた。今年度は連携型の指定は外れたが、昨年度形成した基盤を軸に、地域防災推進委員会を開催し、継続的・発展的な連携を目指し取り組みを進めた。

(1) 地域防災推進委員会

本校を会場に、小中高の各復興教育スクール担当を中心、6/5、12/11の年2回開催した。第1回の委員会には久慈市教育委員会にもご出席いただいた。今年度は昨年度課題としてあげられた小中合同の引き渡し訓練実践に向けての協議や、中高合同の避難訓練に向けての話し合いが行われた。今年度実施までには至らなかったが、ハザードマップを用いて危険箇所の確認を行ったり、校種を越えて避難訓練を実施するにあたっての各校の課題等を議論することができた。具体的な実践までは各校でクリアすべき課題が多くあるが、その第一歩となる基盤づくりを地域防災推進委員会で行っている段階である。成果として、各校の窓口が明確となり、具体的な連携方法の提案や、各校のニーズに応じた対応をしやすくなったことがあげられる。

次年度以降も無理のない範囲で細く長く、より意味のある連携を続けていくことが目標である。



(地域防災委員会の様子)

(2) 久慈小学校・久慈中学校とのNIE実践

今年度は本校情報ビジネス系列流通ビジネス科目群3年次生が久慈小学校・久慈中学校とNIEの実践を通し、防災・復興について理解を深めた。東日本大震災や台風豪雨による災害を教訓に、地域の未来を担っていく児童生徒たちが地域防災の知識を深め、地域復興へと考えを広げていける取り組みを目指し活動を実施した。

まず、連携にあたって、高校では岩手日報社の方を講師として招き、「新聞の読み方講座」を受講したり、地域に関する記事を集め東日本大震災について学び、壁新聞を作製した。その壁新聞をもとに、5/29に久慈市立久慈小学校体育館で4年生105名を対象に、小高連携学習を実施した。高校生が製作した壁新聞をもとに、震災について小学生に語り継ぎ、震災への素直な感想やその時に大切にしたいこと、重要になるものなどを共に考える活動を行った。小学生の反応は、記憶にはあまり残ってはいないが、その後の震災学習の中で培った知識はあり、あらためて震災の未知数の被害を理解できた様子であった。今回の共同学習において、同じような震災が久慈地域を襲ったらどうなるかなど意識させながら、身近にいつかは起こりうるものとして考えていける活動となった。



(NIE実践の様子)

久慈小学校とのNIEの活動を基盤に、6/26に久慈市立久慈中学校で2年生150名を対象に、中高連携学習を実施した。15グループに分かれ、災害が起こった場合について考えを深める活動を行った。小学生との活動を説明し、中学生の意見や感想を付箋に書き出し、グループ分けを行いながら、優先すべきものは何かを導き出しながらそれぞれのグループで発表し共有した。後半は、避難すべき場所に相応しい立地条件や必要な設備は何かを考え、久慈市のハザードマップを用いながら、学校周辺に指定されている避難場所を確認し最適な場所はどこになるかを共に考える活動を行った。実際に避難する場所としてどこが安全か、避難場所には何が必要か、どういうルートで行動すべきか、どんな情報を信じて行動すべきか、などの考えを深める活動となった。



(グループワークの様子)

2 宮古市田老地区との交流に係る取り組み

復興教育スクールの指定を受けた平成27年度から4年間継続してきた宮古市田老地区との交流は、今年度より形を変えて8/27、1/29の2回実施した。昨年度まで活動の拠点となっていた仮設住宅利用者の支援を行う田老サポートセンターが閉所となったことを受け、今年度からは宮古市社会福祉協議会田老福祉センターと連携し、復興団地周辺の集会所と公民館で交流会を実施することができた。施設の予約から準備に至るまで、すべて自分たちで行うことに不安はあったものの、これまで同様多くの馴染みの住民の皆さまに「待っていたよ」「次はいつ来るの」「今度の企画は何か毎回楽しみにしているよ」と声をかけていただき、生徒たちの自信や、社会における自己有用感の獲得につながったようであった。生徒の感想には「このような交流が、地域のコミュニティを支える役割があると感じた」「感謝されたり、感謝したり、人と人の関係って素晴らしいと思った。」など、交流から自分たちが学ぶ福祉の意味や、人と関わることの喜びを見出したようである。



(第1回交流会：消しゴムハンコで団扇づくり)

今年度第2回の交流会は、交流学習スクール事業で活動を共にしてきた一戸高校介護・福祉系列と共同開催し、互いの高校での学びを生かした交流を実施することができた。今自分たちにできることは何かを考え、協力することでその可能性を大きく広げられると感じたようであった。



(第2回交流会；一戸高校との合同開催)

II 取組の成果と課題

今年度は昨年度築いた連携の基盤を土台とし、それらの継続・発展を目指して事業に取り組んだ。校種や自校の枠を超えた取り組みから、新たな発見が生まれ、これまでの取り組みに新たな価値を見出すことにつながった。特にNIEや交流会では、生徒たちが新たな気付きを得て、課題を見つけ、それを自分たちの力でより良いものに発展させようとする動きが見られ、大きな成長と手ごたえを感じている。

今後の課題は、連携の質を担保することである。形骸化された連携とならぬよう、組織性、総合性、継続性が求められると考える。単年度ごとの計画はそこまで難しくはないが、それを続けていくこと、人が変わっても継続できる体制があること、一部ではなく全体を捉えた連携を考えていくことを次年度の課題として、今後も意味のある活動を続けていきたい。